『源氏物語』の六条御息所の筆跡について

朴＊　英美

はじめに

六条御息所は『源氏物語』の中で名筆であると語られている。「物の怪」を中心に論じられることの多い御息所であるが、能書家であることが人物造型の重要な要素であることは広く認められている。[1] これまで『源氏物語』中の書に関する論考において、御息所の筆跡が取り上げられてきた。[2] また、作中に語られた御息所の手紙全例をたどる大門君子氏の論や、「文字まなび」の観点から御息所と源氏との関係を追究した亀田夕佳氏の論などがある。[3]

『源氏物語』中に、和歌を中心とした御息所の手紙文の筆跡について四回（葵巻二回、賢木・須磨巻各一回）言及があり、梅枝巻のいわゆるかな書評の場面では源氏が御息所の筆跡を回顧している。[4] これらはいずれも源氏の評価を通して語られる。従来の論は、主に御息所の筆跡を受けとめる源氏に即して論じられてきた。物語が源氏の視線を通して語るのだから当然であるが、しかし、一方でまた、筆跡表現に御息所の心情を読み取ることも可能なのではないか。本稿はこの点を追究したい。筆跡表現に書く側の女君の心情を読み取り、読解を豊かにすることを目標とする。

一　葵巻の六条御息所の二つの筆跡

まず、葵巻の六条御息所の筆跡を取り上げる。葵巻は、六条あたりに住む高貴な女性としか語られていなかった御息所が、故東宮の妃であった人物であり、これから伊勢に下向する斎宮の母君であると再設定され、車争いの屈辱を受け、生霊化して葵の上をとり殺すというように、御息所が物語展開の中心人物となる巻である。葵巻では六条御息所が源氏に贈った和歌二首について筆跡表現がある。

A御文ばかりぞ暮つ方ある。（源氏）「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから、

（御息所）「袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき山の井の水もことわりに」とぞある。御手はなほここらの人の中にすぐれたりかしと見たまひつつ、いかにぞやもある世かな、心も容貌もとりどりに、棄つべくもなく、また思ひ定むべきもなきを苦しう思さる。（葵②三四～三五）

車争いの後、苦しむ六条御息所を源氏は訪ねた。翌日の夕暮れ、御息所に源氏からの手紙が届く。そこには、源氏の子を身籠っている葵の上の状態が安定しないのでそちらに行けないとあった。御息所はこれを、いつもの口実と思いながらも、「袖を濡らす恋路（泥）と知りながら、泥に下り立つ田子のように、恋路に踏み込んだ私は、身のつたなさを思います『山の井の水』（が浅くて袖が濡れるように、あなたの思いが浅くて私が涙に濡れるの）も当然で」と返事の和歌を書いた。源氏は御息所の筆跡は多くの女性の中で優れていると思う。具体的な筆跡描写ではないが、「御手はなほここらの人の中にすぐれたりかし」と源氏が思うほど美しい文字であることに注目したい。これは物語の中で御息所が能書であることに触れた最初の記述である。御息所が能書家であることは、ことさらな人物紹介の文章ではなく、場面の中で示された。

『新全集』は六条御息所の歌について「源氏への未練から、異例の女からの贈歌となった」と注する。源氏が御息所の和歌を引き出したとする高木和子氏の指摘もある[5]が、ここでは和歌を先に詠んだのが御息所であることを重視したい。今井久代氏は、御息所の和歌が「隙のない完璧な詠歌である」と指摘した上で、「山の井の水もことわりに」と添えられた「ことわり」にも着目し、「相手を詰るのでなく、仕方ないことも何もかもわかっている、と理知的な態度を鎧おうとするのであるが、いかに理知と品格を装おうとしても、そもそも女の側から、特に「折」を契機としたわけでもなく歌を詠みかけたところに、源氏に強く訴えかけたい御息所の真情は明らかである」

〔キーワード〕『源氏物語』／六条御息所／筆跡／手紙／紫式部

＊平成一九年度入学　比較社会文化学専攻

と述べ、歌意とともに、歌を贈る行為から御息所の真意を捉える。[6]

亀田夕佳氏は、「山の井」の語が、『古今和歌集』「仮名序」に手習いの初めの歌の一つとされる「安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」を想起させるところから、御息所が「山の井の水」と添えたのは、「光源氏に女手を教えた頃の甘やかな思い出をよりどころとしようとしたためではなかったか。自分が光源氏と唯一つながりうるのは〈文字〉なのだと自覚していたのではないだろうか。だからこそ一分の隙もなく精一杯の心配りをして文をしたためたのだ」と指摘する。[7]後述するように、源氏はかつて「女手に心を入れて習ひし盛りに」、御息所の墨跡を入手し、それに心ひかれたのであった。

今井氏、亀田氏の指摘を受けとめ、さらに考えたい。筆跡表現からは何が読み取れるだろうか。源氏が、多くの女性たちの中でも格別に優れていると思う美しい文字である。女である御息所が自ら恋の苦しさを告白する歌を書きながらも、その文字の美しさによって、それが御息所自身の品格を下げることにはなっていない。ここでは、優れた筆跡が自身の品格を保つ手段として用いられていると言える。歌の言葉と筆跡とは一つの表現をなす。貴婦人が自らを農夫に喩える激しい内容と美しい文字とが一体となって相手に訴えかけるように、女君は意図して書いている。また、そう読めるように、物語が、筆跡への言及を方法として用いていると考えられるのである。

次は同じ葵巻で、葵の上が亡くなった後の場面である。

B深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、とならはぬ御独り寝に、明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。いまめかしうも、とて見たまへば、御息所の御手なり。（御息所）「聞こえぬほどは思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。（葵②五一）

葵の上の死後、源氏は馴れない一人寝でなかなか眠れない。霧の濃い朝、花が咲き始めた菊の枝に、濃い鈍色の紙の文が付けられ、源氏に届く。源氏は筆跡により、それが六条御息所から送られたことに気付く。御息所は「便りもさし上げない間の私の気持を分ってくださるでしょうか。人生は悲しい―葵の上が亡くなった―ことを聞いて涙しながら、残されたあなたの袖はどれほど濡れているかと思いやっています。ただ今の空を見ても、胸にあまる思いがあります」と手紙を書いた。御息所の筆跡は普段よりも優れていて、源氏は手紙を手放せないが、生霊の事件について触れずに、そしらぬ態度で書かれていることを不愉快に思う。

御息所の筆跡は、源氏の目に「常よりも優にも書い」てあると捉えられた。「優（いう）なり」は『源氏物語』中に他に五例見られる。それらは、すぐれた人格（二例）、芸術への深い造詣に対する期待感（一例）、琴の音色の美しさ（二例）を表す（帚木①五七～五八、絵合②三八七、若菜上④一〇〇～一〇一、若菜下④一九〇、手習⑥三五九）。筆跡の形容に用いられるのは、六条御息所の場合のただ一例である。

Aの時点で「御手はなほここらの人の中にすぐれたりかし」と評された御息所が、さらにいっそう、普段以上に美しい文字を書くことから何を読み取れるだろうか。引用Bの後に、源氏は御息所に返事をしないのも情けがないことだと思い、恨めしさを「思し消」してほしい、こちらも言いたいことがあるが言えないと、生霊の正体をほのめかす返事をした（葵②五二）。それを見た御息所は「ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいといみじ」（葵巻②五二）と絶望する。

鈴木日出男氏が詳述するように、六条御息所は徹底して「見られる」ことを意識する女君である。[8]源氏の返事を見て、「さればよ」と思ったというのだから、御息所はBの手紙を書いた時点で源氏が生霊の正体を知っているかどうか確信がなかったことが分かる。生霊が自分であると知られているかどうか気にかかる心の不安から、「見られる」意識をもつ御息所は、手紙に心の乱れが表れないように、入念に文字を書いたのだと考えられる。「常よりも優に」書く筆跡に込められた御息所の心情は、心の乱れを見透かさないでほしい、であったと読み取れる。

車争いの後のAも葵の上が亡くなった後のBも、御息所自らの贈歌である。女が自ら歌を贈るという異例な行動を取りながらも、誰よりも優れた筆跡を用いることによって、彼女自身の品格を守りつつ、安定しない源氏との関係への不安を隠そうとした。

二　筆跡表現としての「なまめく」「なまめかし」

六条御息所の筆跡は、賢木・須磨両巻にも描写される。その際、「なまめく」（賢木巻）、「なまめかし」（須磨巻）の語が用いられる。筆跡を形容する「なまめく」「なまめかし」は、他に「なまめく」が藤壺に一例と匂宮に一例、「なまめかし」が紫の上に

一例用いられる。

「なまめく」「なまめかし」が表すのは、端的にいえば「優美」にあたるとされる。後藤祥子氏は「王朝美的語彙の一つ。いわゆる「優美」にあたる。本義は、語頭「なま」の、いくぶん未成熟に見える初々しさにある。「なま」とは、たとえば『伊勢物語』一八段「なま心ある女」のように、柔軟で感じやすい資質をもった、などの意味で用いられる。後世ややもすれば、官能的な魅力、性的媚態が強調されて原義を離れたが、本来はむしろ逆に、清新で品のよい、あえかな美しさを表わした」と指摘する。(9)

右の指摘を踏まえながら、『源氏物語』の「なまめく」「なまめかし」についてあらためて用例を検討してみると、「なまめく」「なまめかし」は「(朧月夜ハ帝ノ)御容貌(かたち)などなまめかしうきよらにて」(澪標②二八一)のように優雅な姿を描写する例が最も多い(「なまめく」二一例、「なまめかし」三二例、「なまめかしさ」四例)。

次に、「(薫ガ庭ニ下リ花ノ中ニ立ツ姿ハ)あやしく、ただうち見るになまめかしく恥づかしげにて、いみじく気色(けしき)だつ色好(いろこの)みどもになずらふべくもあらず」(宿木⑤三九一)のように妖艶な様子を表す例(「なまめく」三例「なまめかし」二例)や、源氏四十歳の賀の「なまめかしく人の親げなくおはしますを」(若菜上④五六)のように実際の歳よりも若い容貌を描写する例(「なまめく」二例「なまめかし」三例)がある。

服装を表す場合に「なまめく」五例「なまめかし」一例見られる。「いとなまめかしき袿姿(うちきすがた)うちとけたまへるを、(尼君八)いとめでたうれしと見たてまつるに」(松風②四一一〜四一二)のようにくつろぐ源氏の様子や、珍しく華やかな服装をした鬚黒の例「右大将(=鬚黒)の、さばかり重りかによしめくも、今日(けふ)の装ひ(よそ)いとなまめきて」(行幸③二九二)がある。この二例は普段とは異なる様子から新鮮な優雅さを表す場面で、「なまめく」「なまめかし」の特徴が分かりやすい例である。

また、病人の美しさを形容する例が「なまめかし」三例「なまめく」一例「なまめかしさ」一例ある。それ以外にも頻度数は低いが、付添いの女房(童)の様子、楽器の演奏、香や歌の評、箱の模様、草子、泣く様子、使いの禄、夏の緑蔭など、さまざまな場面で「なまめく」「なまめかし」の語が用いられている。

以上のような用例を考察した結果、「なまめく」「なまめかし」は、華やかな様子を形容する一方、音楽や服装などを簡素にした場合の様子の描写にも用いられていることが分かった。これらは相反するように思われるが、いずれも普段とは異なる新鮮な優雅さを肯定的に感じる場合に用いられている。このような語感に注意しながら、筆跡を表す「なまめく」「なまめかし」について考察したい。

本節では、御息所以外の、紫の上の「なまめかし」、藤壺、匂宮の「なまめく」の筆跡を取り上げる。まず、賢木巻にある紫の上の筆跡の叙述である。

…御返り、白き色紙(しきし)に、

(紫の上)風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささがに

とのみあり。(源氏)「御手(て)はいとをかしうのみなりまさるものかな」と独(ひと)りごちて、うつくしとほほ笑(ゑ)みたまふ。常に書きかはしたまへば、わが御手にいとよく似て、いますこしなまめかしう女(をんな)しきところ書き添へたまへり。何ごとにつけても、けしうはあらず生(お)ほし立てたりかしと思ほす。(賢木②一一八)

雲林院に籠る源氏は紫の上が気がかりになり、手紙を送る。それには、紫の上を置いて離れて過ごす心は落ち着かないとの歌を書いた。紫の上は白い色紙に「枯れて色あせた浅茅の露にかかっている蜘蛛の糸は風が吹くと真っ先に乱れる(あなたは心を変わりするから、私のほうが落ち着きません)」の意の和歌を綴る。源氏の心変わりを案ずる和歌である。源氏への恋心を「なまめかし」い筆跡で表している。

紫の上の返事を見た源氏は、文字の上達ぶりに微笑む。そして、いつも紫の上と文を交わしているから、紫の上の筆跡は源氏自身の筆跡に似ているが、もう少し「なまめかし」く、女らしいところを加えて書いてあると見て、何につけてもよく育てられたと源氏は思う。紫の上は不安な心情を訴えた歌を詠むが、「なまめかし」い筆跡を用いることで源氏に自身の新しい魅力を感じさせた。さらに「女しき」という表現からも、女性としての紫の上の魅力が強調されるように文字を綴った。

次は藤壺の「なまめく」筆跡である。

故入道の宮(=藤壺)の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞ少なかりし。(梅枝③四一六)

梅枝巻で源氏は女性たちの筆跡について批評する。藤壺の筆跡はじつに深味があり新鮮な優雅さがあるが、弱いところがあって、余韻あふれる美しさに欠けていたという。この例から、源氏と手紙のやり取りの中で藤壺は優雅で魅力のある筆跡で文字を綴ったことが分かる。しかし、弱さがあって余韻が足りないのは、源氏との関係に適切な距離を置くためと考えられる。

次に、匂宮の「なまめく」筆跡について見てみよう。

まだ朝霧深きあしたに、急ぎ起きて奉りたまふ。

(匂宮)「朝霧に友まどはせる鹿の音(ね)をおほかたにやはあはれとも聞く

もろ声は劣るまじうこそ」とあれど、（略）（大君八）この宮（＝匂宮）などをば、軽らかに、おしなべてのさまにも思ひきこえたまはず、なげの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も、をかしきさまになまめきたまへる御けはひを、あまたは見知りたまはねど、これこそはめでたきなめれと見たまひながら、…

（椎本⑤一九五～一九六）

匂宮は父宮を亡くした姫君たちを慰め、彼女たちの悲しみを思う匂宮自身の心を伝えた。姫君たちの泣き声を「鹿の声」と喩え、「朝の霧で仲間とはぐれた鹿の声を、ただ可哀そうにと聞いているでしょうか（父を亡くした姫君たちに深く同情しております）。　私も（姫君たちの）もろ声に劣らず泣いています」の意の和歌を書いた。大君は、男性の手紙の書きざまをあまり知らないが、匂宮の言葉や筆跡の「をかしきさまになまめきたまへる御けはひ」を素晴らしいものと見る。「なげの走り書いたまへる御筆づかひ言の葉も」という言い方から、和歌の内容と筆跡とが一体として受け止められていることが読み取れる。匂宮の手紙の文面では姫君を慰める一方で、「なまめく」筆跡は姫君たちに自身の魅力を新鮮に感じさせるために用いられた。

『源氏物語』の「なまめく」「なまめかし」の筆跡は、右の三例、以下に取り上げる御息所の場合ともに、いずれも異性に認識されている。異性の目に魅力的に映る美質を表すことにも注意しておきたい。

三　賢木巻の六条御息所の筆跡

賢木巻では、巻頭の野宮の別れの場面を経て、六条御息所は娘斎宮とともに伊勢に下る。葵巻では御息所から源氏に和歌を詠みかけていたが、賢木巻では光源氏が詠みかけ、御息所が返歌する関係に変わる。手紙に書かれた次の贈答もそうである。

C暗う出でたまひて、二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条院の前なれば、大将の君（＝源氏）いとあはれに思されて、榊にさして、

（源氏）ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや

と聞こえたまへれど、いと暗うもの騒がしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ御返りある。

（御息所）鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ

ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよしよししくなまめきたるに、あはれなるけをすこし添へたまへらましかばと思す。

（賢木②九四～九五）

御息所が伊勢へ下向する日、暗くなってから宮中を出発した一行が源氏の自邸二条院の前を通った際、源氏は榊に付けて「自分（源氏）を振り捨てて今日は出立するにしても、旅の途中で後悔の涙に袖が濡れないだろうか」の意の歌を贈る。　翌日、逢坂の関を越え、御息所は簡略に返事を送った。「鈴鹿川の八十瀬の波に私の袖が濡れるか濡れないか、誰が伊勢まで思ってくれるでしょうか（誰もいませんね）」の意の和歌である。御息所の手紙をみた源氏は、「御手いとよしよししくなまめきたる」と思うが、「あはれなるけをすこし添へたまへらましかばと思す」と少し物足りなく感じる。

「よしよしし」は、手段・方法、事情・いきさつ、由緒、縁故などの意を表す名詞「由」を重ねた形容詞である。『源氏物語』に「よしよしし」は七例ある。当該例を除く六例を列挙しよう。

（a）　さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、いとよしよししう気高きさまして、めざましうもありけるかなと見棄てがたく口惜しう思さる。（明石②二六四）

（b）　さぶらふ人々も若やかにすぐれたるを、姫君（＝明石の姫君）の御方にと選らせたまひて、すこしおとなびたるかぎり、なかなかよしよししく、装束ありさまよりはじめてめやすくもてつけて、…　（初音③一四三～一四四）

（c）　なま孫王めくいやしからぬ人あまた、王、四位の古めきたるなど、かく人目見るべきをりと、かねていとほしがりきこえけるにや、さるべきかぎり参りあひて、瓶子とる人もきたなげならず、さる方に、古めきて、よしよししうもてなしたまへり。

（椎本⑤一七四）

（d）　ほめつる装束、げにいとかはらかにて、みめもなほよしよししくきよげにぞある。

（宿木⑤四九二）

（e）　北の方は人知れずいそぎたちて、人々の装束せさせ、しつらひなどよしよししうしたまふ。

（東屋⑥三二）

（f）　法師なれど、いとよしよししく恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを、

（手習⑥三四九）

（a）は翌々日に明石からの帰京を控えた源氏が捉えた明石の君の様子である。（b）は、六条院の春の町で紫の上に仕える女房たちについて述べる。若々しくすぐれた女房を明石の姫君づきにしたので、やや年かさの女房ばかりであるが、それがかえって「よしよしし」だという。（c）は、匂宮の初瀬詣でに従った人たちが帰途に立ち寄った宇治の八の宮邸での歓待の様子である。八の宮の縁者たちの支援によって、目安く

もてなせたという。「よしよししし」が「古めきて」に続く。（d）は、薫と対面した弁の尼の様子である。橋姫巻に六十歳弱とあった弁は、この時点では六十代前半となる。（e）は浮舟の母中将の君が浮舟の結婚準備を隠れて進め、用意した部屋の様子である。（f）は浮舟を出家させて後、小野の庵に立ち寄った横川の僧都の様子である。

このように、「よしよししし」は人の行動や人の様子（容貌）、家や部屋の雰囲気などを表す。（b）（d）（f）の例で、年齢の高い人物に用いられている点に注意したい。また、（c）でも、「古めきたる」人たちの支援とあいまって、古風なもてなしであったという。これらの例から、「よしよししし」は、その人自身の年功、家柄の有する伝統によってもたらされる価値を表すと言える。したがって、（a）（e）の場合も、一朝一夕には得られない、由緒のある洗練された美だと解せる。『源氏物語』の「よしよししし」七例中、筆跡の形容は御息所の場合のみである。Cの御息所の筆跡をいう「いとよしよししくなまめきたるに」も、「じつに熟達した、人目を奪って新鮮な魅力を感じさせる優美さがあるものの」のように解せる。

次に、「あはれ」の不足についてである。『新全集』は「あはれなるけをすこし添へたまへらましかばと思す」に「しんみりした情感がほしい意。伊勢まであなたの思いは及ぶまいと強く言い捨てた御息所の歌を、もっと素直に嘆きを吐露してくれたならと不満に思う」と注し、御息所の和歌の内容に対する源氏の感想として解する。一方、玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店）の「鑑賞」には「御息所は、当代屈指の手かきである。（略）品格のあること、優美なことにかけては、この人の右に出る人はいない。だが、ただ一つ物足りなく思うことは、「あはれなるけ」（ものやわらかさ、さびしさ、心の弱さ）のないことである。親しくなるまでは、そこまで気がつかなかったが、今となっては、それが最も惜しまれる。筆跡は人柄を表わすものであった」とある。『日本古典文学大系』（岩波書店）には「あはれなるけを」の部分の本文が「あてなるけを」とあるが、やはり筆跡のことをいうと解している。「あはれ」が不足しているのは和歌の内容か筆跡か、見解が分かれているようであるが、和歌の言葉と筆跡とは一体として一つの表現をなしていると私は考える。

大門君子氏は御息所の筆跡について「筆跡は、御息所の性格そのものをずばりと表わしている。上品で優美、だが「つつましき」ところがあって気を許すことができない。源氏が隔たっていった原因は実にここにあった。今、源氏は手紙を手に御息所を思う」とし[10]、太田敦子氏も「源氏の心に沿えばこの歌は、内容・筆蹟に対して不満を喚起させる歌ということになる。（略）次に筆蹟だが「あはれなるけをすこし添へたまへらましかば」とあり、『細流抄』以来「あはれ」が足りないとされてきた」とする[11]。

鈴木日出男氏は、御息所の和歌について、「源氏の言い分をきっぱりと切り返している」とする一方で、「それにしてもこの返歌は、源氏の贈歌の言葉に執拗なまでに密着して「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず」としているだけに、相手への反発の発想のうちにも、執ねきまでの愛着がこめられている」とも指摘している[12]。筆跡表現も、こうした和歌の内容の複雑さに見合うように語られていると見られないだろうか。

「誰が伊勢まで思ってくれるでしょうか」という御息所の歌は、源氏への恋を積極的に詠んだ歌ではないものの、「私のことを思ってください」という歌意も読み取れ、そのような御息所の心情が新鮮で優雅な筆跡に表れている。「なまめく」は葵巻の異常な恋の状態から解放され、源氏との恋にも新しい局面を迎える心情を表す筆跡である。

一方、「よしよししし」は御息所の品格のある奥ゆかしさを表現している。さらに、手紙を簡略にし、源氏に「あはれなるけ」が足りないと思わせるような書き方で、源氏への未練を断ち切る決意を表わしている。語り手は「まして旅の空は、いかに御心づくしなること多かりけん」（賢木②九五）と御息所の苦しい心情を語る。このように御息所の筆跡が複雑な心情の表現を形成していることが分かる。

四　須磨巻の六条御息所の筆跡

須磨巻に入り、須磨に退居した源氏は女君たちと手紙を交わす。伊勢の六条御息所とも往来があった。

Dまことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへたづね参れり。浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしくいたり深う見えたり。（御息所）

「なほ現とは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなん。さりとも、年月は隔てたまはじと思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめ刈る伊勢をの海女を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになりはつべきにか」と多かり。

（御息所）伊勢島や潮干の潟にあさりてもいふかひなきはわが身なりけり
ものをあはれと思しけるままに、うち置きうち置き書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻きつづけて、墨つきなど見どころあり。
（須磨②一九三～一九四）

源氏は伊勢に使いを送り、伊勢の御息所から返信が届く。須磨にいる源氏を慰めるために御息所は長文の手紙を送った。『源氏物語』の中で長文の手紙はまれである。御息所の手紙には心に触れる深いことが書かれていて、文章も筆跡も格別に「なまめかし」く「いたり深し」と源氏には思われた。「言の葉、筆づかひなどは…」とあり、文面の内容と筆跡とを一体として受け止めていることが明瞭である。

御息所は「現実とも思えませぬお住まいだとうかがうにつけても、長い夜に迷っているのかと思いまして。しかし、あなたが都に帰る日は遠くないと思いますが、罪の深い私こそ、またあなたにお会いしてお話し申し上げることははるか先のことでしょう。伊勢で浮き布を刈る海人―つらい思いで過ごす私のこと―を思ってください、塩作りのために海水を垂らすように涙で濡れるという須磨の浦で。万事に思い乱れる世の中の有様も、さらにこの先どうなってしまうのでしょう」と多く書いている。御息所の手紙にはさらに一首和歌がある。「伊勢島の潮が引いた潟にあさっても、貝がないように、生きる甲斐のないのはわが身でした」と。これらの文面を、御息所はしみじみと思うままに、筆を置いては書き、置いては書いたように源氏には思われたという。間接的にだが、御息所が入念に書いたことがうかがえる。御息所の手紙は、白い唐の紙四、五枚に巻き続けて、墨つきもみごとである。賢木巻のCでは不足に思われた「あはれ」がここでは十分に感じられた。続く記述に「あはれに思ひきこえし人を、一ふしうしと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひうむじて別れたまひにしと思せば、今にいとほしうかたじけなきものに思ひきこえたまふ、をりからの御文いとあはれなれば…」とある。二人の間に「あはれ」の共感が成り立っている。

御息所の筆跡を表わす「いたり深し」を考察したい。現代の注釈書、例えば『鑑賞と基礎知識』は「「至り」は学問・才芸などに深く達すること。造詣」と注するが、「いたり深し」の語感をあらためて検証する。『源氏物語』中に「いたり深し」は九例あるが、筆跡の形容は、右の御息所についてのみである。他の用例を取り上げよう。

（g）「まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。（略）公事をも言ひあはせ、私ざまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際、なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなむはべらざりし。…」（帚木①八五）

（h）「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何のいたり深き隈はなけれど、ただ海のおもてを見わたしたるほどなん、…」（若紫①二〇二）

（i）見る人ただにはえ思ふまじき（紫上ノ）御ありさまを、至り深き御心（＝源氏ノ心）にて、もしかかることもやと思すなりけりと思ふに、…（野分③二六五～二六六）

（j）「いとまがまがしき筋にも思ひよりたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。（略）思ひ隈なしや」と笑ひたまふ。（藤袴③三三七）

（k）「…太政大臣（＝源氏）の、さる世にたぐひなき御おぼえをばさらにも聞こえず、心恥づかしういたり深うおはすめる御あたりに、憎げなること漏り聞こえば、いとなんいとほしうかたじけなかるべき。…」（真木柱③三六一）

（l）「世の中によしありさかしき方々の人とて、見るにも、この世に染みたるほどの濁り深きにやあらむ、賢き方こそあれ、いと限りありつつ及ばざりけりや。さもいたり深く、さすがに気色ありし人（＝入道）のありさまかな。…」（若菜上④一二六）

（m）末の世の伝へは、またいづ方にとかは思ひまがへん、さやうに思ふなりけんかし、など思して、この君（＝夕霧）もいといたり深き人なれば、思ひよることあらむかしと（源氏ハ）思す。（横笛④三六八）

（n）ことごとしきさまにも聞こえたまはざりければ、くはしきことども知らせたまはざりけるに、女の御おきてにてはいたり深く、仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを、…（御法④四九五）

（g）は雨夜の品定めの一節で、式部丞が、公私ともに種々の事について助言を受けられるほどの知識を持つ女性を語っている。（h）では良清が源氏に明石の海岸について、特別に人に知られぬおもしろい所はないがと説明する。（i）は、野分の日に夕霧が紫の上を見た後で想起した源氏の用心深さをいう。（j）は、夕霧との会話の中で、玉鬘出仕に関する源氏の思惑を推量する内大臣の気性について、源氏が語る言葉。（k）は、六条院の源氏の暮らしぶりについて、鬚黒大将が語る言葉である。（l）は、世評の高い僧侶も現世に執着する心があって限界があることと比較しながら、源氏が、明石の入道を回顧する箇所である。（m）では、薫出生の秘密について、夕霧が気づくかもしれないと、源氏が思っている。（n）は、法華経千部供養に際し、紫

の上が仏法にも詳しいことをいう。

『源氏物語』中の「いたり深し」は、思慮・配慮が行き届いていること、ふつうの人であれば気づかないようなところまで的確に処置できる状態を表す。それらは学識や経験、鍛錬に基づくことのようである。風景についていう（h）がやや異質であるが、常識的な範囲を超えた珍しいおもしろさをいうのであろう。

御息所の筆跡をいう「なまめかしくいたり深う」は、新鮮な感覚の筆跡であると同時に、隅々まで行き届いた配慮に満ちている、ぐらいの意となる。「なまめかし」と「いたり深し」とは、相反するほどではないが、異質な範疇を表す形容詞同士の組み合わせである。御息所は、歌では「須磨の浦で私を思ってください」「甲斐のないわが身」と源氏への恋を詠み、散文では慣れない生活をする源氏を気遣い、京へ帰る日は遠くないと慰める。和歌と散文で書風を変えたわけではないが、「なまめかしく至り深う」は、そうした複雑な御息所の心情を表す筆跡だと読み解けよう。

CとDの御息所は「なまめく」「なまめかし」とされる新鮮な魅力のある筆跡を用いることで、源氏へ思いを表わした。さらに、御息所は「よしよしし」や「いたり深し」のような筆跡を用いることで、自身の品格や思慮を伝えようとした。

五　梅枝巻における六条御息所の筆跡

梅枝巻で、明石の姫君の東宮参入の準備が進む中、源氏は、紫の上を相手に、昔に比べて何かと衰えていくことが多い世の中であるが、かな書のみは、最近になってこそ達人が多くなったと述べた上で次のように続ける。

…女手（をむなで）を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集（つど）へたりし中に、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行（ひとくだり）ばかり、わざとならぬを得て、際（きは）ことにおぼえしはや。　（梅枝③四一五～四一六）

源氏自身が女手を熱心に習った時期に、無難な手本を集めたが、その中で御息所が心に入れず何気なく書いた一行ほどの、無造作な筆跡が格別に優れていたと源氏は評する。「心にも入れず…」に、『新全集』は「上手に書こうと思って書いたのではない走り書き」と注する。また、「女手を…」について、『鑑賞と基礎知識』は「「女手」は平仮名。源氏が女手を習うのは、恋文を書くため」と説く。御息所の筆跡を源氏が入手したのは、恋愛関係になる以前だと解せる。

源氏は、御息所の何げない書きぶりを特別優れたものと感じ、その筆跡を好んでいた。葵、賢木、須磨巻に語られた源氏へ送った手紙の筆跡の入念さをふまえると、いかにも皮肉に、悲劇的に響く。御息所が亡くなり、時間が経ち、初めて明かされる二人の恋の始まりは筆跡からであった。

結論

以上、六条御息所の筆跡について考察した。葵巻の御息所の歌は女からの贈歌であり、一首目は自身の執着を告白するものであった。御息所は、それを誰よりも優れた筆跡で書くことで彼女自身の品格を貶めないようにした。また、源氏に生霊の正体を知られているかどうか不安な御息所は、心の乱れが手紙に現れないよう入念に文字を綴る。

筆跡表現としての「なまめく」「なまめかし」は、新鮮な魅力のある優雅な書きぶりを表したものと解せる。こうした表現は異性とのやり取りの中に表れ、自身の魅力を感じさせるために用いられていた。御息所が伊勢に向かう賢木巻の筆跡は「なまめく」「よしよしし」と形容される。その手紙からは、源氏への愛とその一方で遠く離れることで関係を断ち切ろうとする決心が窺える。また、御息所は須磨巻で、散文で都から離れた源氏を慰める一方、和歌では源氏への未練を表した。その内容と筆跡は一体となり「なまめかし」「いたり深う」と表現された。また、御息所の筆跡については「よしよしし」や「いたり深し」のように、筆跡を表すのにまれな表現を用いることで、名筆である御息所の筆跡が強調されるように語られている。

梅枝巻の御息所の筆跡評には、源氏がさりげない御息所の筆跡に心ひかれていたことが示され、それだけに御息所との関係の悲劇性が改めて浮かび上がる。

このように筆跡を中心に分析することで、文字に込められた御息所の不安や、源氏への恋と葛藤が浮き彫りになり、筆跡の形容によって登場人物の心理を描く物語の手法が明らかになった。

注

(1)　「人物ファイル―六条御息所 10筆跡・紙選び」(八島由香)『人物で読む『源氏物語』第七巻―六条御息所』(勉誠出版、二〇〇五年)など

(2)　秋山虔「源氏物語世界の書について」(『源氏物語の論』(笠間書院、二〇一一年)。初出二〇〇二年)など

(3)　大門君子「源氏物語の手紙文―手紙文に見る六条御息所―」『愛媛国文研究』第四五号、一九九五年一二月。亀田夕佳「〈文字〉の女―六条御息所試論―」『古代文学研究(第二次)』第一四号、二〇〇五年一〇月

(4)　梅枝巻で語るかな書をめぐる物語が、全体として源氏の文化的王者性を描くことについては、木谷眞理子「仮名書道論」『源氏物語の鑑賞と基礎知識NO.31梅枝・藤裏葉』(至文堂、二〇〇三年)を参照されたい。

(5)　高木和子「花散里・朝顔の姫君・六条御息所の物語と和歌」池田節子ほか編『源氏物語の歌と人物』(翰林書房、二〇〇九年)六〇頁

(6)　今井久代「六条御息所について」坂本共展ほか編『源氏物語の新研究―内なる歴史性を考える』(新典社、二〇〇五年)三四五頁

(7)　亀田氏注(3)前掲論文

(8)　鈴木日出男「車争い前後」『源氏物語虚構論』(東京大学出版会、二〇〇三年)三七六頁。初出一九八〇年

(9)　秋山虔編『王朝語辞典』(東京大学出版会、二〇〇〇年)「なまめかし」(後藤祥子)

(10)　大門氏注(3)前掲論文

(11)　太田敦子「関のあなたの六条御息所―伊勢下向をめぐる表現機構―」『国学院大学大学院紀要・文学研究科』三六号、二〇〇五年三月

(12)　鈴木日出男「愛憐の歌―六条御息所と光源氏(二)」『源氏物語虚構論』(東京大学出版会、二〇〇三年)四〇一頁。初出二〇〇〇年

＊『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館)によった。

Study on Rokujo-no-miyasudokoro's calligraphy in *Genji-monogatari*

PARK Young-mi

人間文化創成科学論叢 第一七巻 二〇一四年

Abstract

Genji-monogatari is Japanese literature of 11century. This study is analysis about calligraphy in *Genji-monogatari*. Especially, the purpose of this study is to understand about calligraphy of Rokujo-no-miyasudokoro. She was a master calligrapher in *Genji-monogatari*. She sent four letters to Gengi.

I examined the relationship between sentences of these letters and descriptions of Rokujo-no-miyasudokoro's handwriting. I also examined nuances of 'yosiyosisi' and 'itarihukasi' in *Genji-monogatari*. These words are keywords describing her handwriting.

The result of these examinations, I showed that combinations of contents of Rokujo-no-miyasudokoro's letter and descriptions of her handwriting represented her complex mentalities.

Keywords: Genji-monogatari (tale of Genji), Rokujo-no-miyasudokoro, Calligraphy, Letter, Murasakishikibu